創立七十周年記念式典挨拶

道を示し続ける責務

会長　上廣榮治

皆様、おはようございます。

私たちは今日の善き日に、我が実践倫理宏正会の創立七十周年の記念式典を、無事に迎えることができました。

昨年は戦後七十年ということで、昭和の長い戦争と、焼け跡から始まった私たちの戦後を振り返る、さまざまな機会がございました。

我が会が倫理社会の創建を目指す活動を開始したのが、終戦の翌年、昭和二十一年（一九四六年）の五月の三日のことでございます。

その前の月には、戦後最初の総選挙が行われておりますから、我が会は文字どおり戦後の社会とともに歴史を刻んできたといえるでありましょう。

以来、会友各位のたゆまぬ実践努力のお蔭をもちまして、本日めでたく、こうして倫理実践七十年を祝うことができました。そのことをまず、ここにご出席の幹部会友の皆様とともに心から喜び合いたいと存じます。

そして、我が会を長きにわたって支え続けてくださったすべての会友の皆様と、私たちの呼びかけを善しとして応援し続けてくださった方々に、心から御礼を申し上げたいと思います。

特に本日は、内閣総理大臣安倍晋三先生をはじめ、朝野のご来賓の先生方におかれましては、公務ご多忙の中、まげてご臨席くださいました。かかる栄誉を賜りましたこと、まことに有り難く、衷心より厚く御礼を申し上げる次第でございます。

実は当初、私は戦後七十年の日本の社会と、我が会の来し方を振り返り、行く末に思いを馳せよう、そんなつもりでおりました。しかし、あることに気付いて、やめました。

一口に「戦後七十年」と申しますが、人の一生からみれば、その大半にも相当する長い歳月です。まして、日本人のおよそ八割が、もはや戦後生まれの方々です。そのような世代の方から見れば、戦後の復興期も高度経済成長期も、もはや歴史的な過去にすぎないのではないかと気付いたのです。そんな話をいたしましても、リアルな現代の課題として受け止めてはいただけないのではないか、年寄りの昔話になってしまうのではないか、と恐れたからです。

実はそれだけではありません。あまり大きな声では申せませんが、総理の戦後七十年談話には、とうてい太刀打ちできないと思ったからでございます。

そこで、最近テレビを見ていて、倫理について考えさせられた三つの番組のお話をさせていただくことにいたしました。

まずはじめは、今年の三月十一日の一日前、つまり、東日本大震災から五年目の前日に放送された、ＮＨＫスペシャル「風の電話～残された人々の声～」という番組です。

五年前、東北を襲った大津波と原発事故という未曽有の大災害。その中で示された被災者たちの悲しみを抑えた沈着な姿や、他者への配慮を忘れない謙虚な態度に、国の内外から多くの称賛の声が上がりました。また、多くの人が身を挺して救援にあたりました。若者たちも全国から駆けつけました。たくさんの救援物資が届き、いくつもの企業や商店が商品やサービスを無償で提供しました。共感の環が日本中に広がっていきました。

大災害によって、誰もが「倫理力」を覚醒させられ、忘れかけていた「無私」と「利他」の行為がよみがえったのでございます。

番組の舞台はあれから五年後の被災地です。岩手県大槌町、ここは十三メートルの津波に襲われて八六一名が死亡、四六一名が行方不明のままという町です。その町の、海を見下ろす丘の上に、電話線のつながっていない不思議な電話ボックスがあります。緑の三角屋根に白い格子の電話ボックス。その中にダイヤル式の黒い電話機が一つ。それが「風の電話」です。

電話のそばにはメモがあります。「風の電話は心で話します　静かに目を閉じ　耳を澄ましてください　風の音が又は浪の音が　或いは小鳥のさえずりが聞こえたなら　あなたの想いを伝えて下さい」。

この電話線のない電話ボックスは、親しい人を亡くし

た人が、想いを風に乗せて対話するための場所です。震災から五年、インフラの復興は進んでも、大切な人を失ったことで前に進めない人も少なくないのです。「風の電話」はそんな人たちの心の支えになっています。

この電話ボックスの主は、佐々木格（いたる）さん。会社を早期退職して、東京に行った子どもや孫たちに、本当の田舎らしい田舎を作ってやりたいと、この土地を購入し、家を建てた。そんな折に自宅から見下ろす海辺の町を津波が襲ったのでした。

生かされた生命を誰かの役に立てたい、そう考えた佐々木さんが思いついたのが、この「風の電話」でした。「最後にせめて一言話したかった人は多いはずだ。突然の別れを強いられ、残された者の気持ちを、少しでも癒すことができたら」と、考えたのでした。

死者と生き残った者との想いをつなぐ「風の電話」のことを伝え聞いた人たちが、一人、また一人とやってきます。

電話ボックスを前にして、なかなか中に入れない人。受話器を手に静かに話し続ける人。名前を呼んで、後はただ涙を流し続ける人。亡くなった父と話したくて青森から四時間かけてやってきたという十五歳の少年。みんな帰るときには一様に安らかな顔になっています。

備え付けのノートには、「会いたくて会いたくて電話した」…「ようやく別れが告げられた」…「お母さんどこにいるの。絶対みつけて、家に連れてくるからね」…「孫ちゃんが三人になったよ。母さんに風呂に入れてもらいたかったよ。母さんの有難味、いますごくわかるよ。また会いたくなったら、ここにくるね」…などと、それぞれの想いが綴られています。

「風の電話」には後日談があります。学校も図書館も書店も流されてしまった町の子どもたちのために、佐々木さんは庭の一隅に「森の図書館」と名付けた木々に囲まれた石造りの図書館を造ったのです。そこには全国から寄せられた児童図書が四〇〇〇冊。子どもたちは庭に出て芝生に寝ころがって読んでもいいのです。

「本当の豊かさ、心の豊かさを考える時代にきている。風の電話や森の図書館は、そんな心のインフラです」と、佐々木さんは話します。

その通りだと思います。この七十年を振り返って、今ほど心の豊かさが求められている時代はなかったのではないでしょうか。その意味では、まさしく実践倫理の出番であり、私たちの時代なのです。

さて、二番目の番組は、先月の八日と九日に放送された、フジテレビの「日本人は本当に幸せですか？」という特別番組です。

主人公は「世界でいちばん貧しい大統領」といわれる、南米ウルグアイの元大統領、ムヒカさんです。

一日目はそのムヒカさんによる大学での講演と池上彰さんとの対談、二日目は東京の浅草、大阪、広島などを訪ねる、ムヒカさんを取材するという内容でした。

ムヒカさんが世界に知られるようになったきっかけは、今から四年前、ブラジルのリオデジャネイロで開かれた国際会議での伝説的なスピーチでした。

スピーチの冒頭で彼が言った一言は、会議場で居眠りをしていた人たちの目を覚まさせました。それはこうです。

「一つ質問させてください。ドイツ人が一世帯で持つ車と同じ数の車をインド人が持てば、この地球はどうなるのでしょうか」

このスピーチは『世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ』という絵本にもなっていて、何かでご紹介したこともありますから、ご存じの方も少なくないと思います。

ムヒカさんは大学生たちに尋ねます。「日本人は本当に幸せですか？」「若い人たちは高齢者よりも幸せですか？」と。このことこそ、ムヒカさんがいちばん聞きたかったことであり、言いたかったことでもあります。それは、「本当の幸せとは何か、本当の豊かさとは何か」という問いかけでもあります。

その答えは、ムヒカさんの言葉の中にありました。

「貧乏な人とは、少ししかモノを持っていない人ではなく、無限の欲があり、いくらあっても満足しない人のことだ」と言い、さらに、「どんなにモノを買っても人は幸せにはなれない。人を幸せにできるのは生きているものだけだ」と言います。家族や恋人や友人や隣人たちと過ごす時間。愛情そして生きる喜び。それらにこそ本当の幸せがあるというのです。

では、私たち日本人は幸せについてどう考えているのでしょうか。改めて問われれば、「お金やモノが豊かであっても幸せとはいえない」と誰もが言います。しかし、本音のところでは、「お金が欲しい。お金があれば幸せになれる」「豊かさとは、お金がたくさんあることだ」という観念から抜け出せないでいるのではないでしょうか。

ムヒカさんは、そんな消費社会に組み込まれた私たちの観念と生活を変えない限り、仕事に追われる日々から抜け出すことはできない、本当の幸せにはなれないというのです。

ムヒカさんは会場に溢れた若者たちに忠告します。

「私たちは発展するために生まれてきたのではない。幸せになるためにこの地球にやってきたのです。人生は短い。だから幸せとは何か、そしてどう生きるかを考えてください」と。

その一言一言に耳を傾ける学生たちの、あまりに真剣な眼差しに、歳とともに自制がきかなくなってきた私の涙腺は、勝手にゆるんでくるのでした。

はじめは「日本人は産業社会に振り回されている、働きすぎだ」と言っていたムヒカさんでしたが、「仕事が好きだ」「働くことが幸せだ」「もっと働いて家族を幸せにしたい」という日本人の生の声を聞くうちに、少しずつ考え方が変わっていきます。

放送の最後に至ってムヒカさんは、「家族を幸せにするために働くのも、楽しくて働くのも、それはいい」と言うまでになりました。

ただ、必ず何か価値のあるものを残すこと。周りの人の幸せのために働くこと。それを忘れないでほしい、と釘を刺します。利己的ではいけない。世のため人のために働きなさいということです。ここに至って、「我も人もの仕合わせ」を目指す私たちと、ムヒカさんの思いは重なったのでした。

ムヒカさんのことはさておいて、日本人は本当に幸せなのでしょうか。戦後七十年、一人当たりのGDPが何倍にもなったのに、政府の世論調査によると、国民の幸福度は高くなっていないといいます。その原因はどこにあるのでしょうか。

少し大胆な言い方をさせていただければ、いま、日本の社会と日本人を不幸にしているものは何かといえば、「拝金主義」と「利己主義」であると私は思います。お金の力と自分勝手が罷り通る社会が、豊かな社会であるはずがございません。それが極まったのが、二十世紀の末から台頭してきた、経済のグローバル化であろうと私は思います。

それは簡単にいえば、国による経済への規制をなくして、市場の自由な競争原理に任せるということです。これまでのように政治が経済をコントロールして、自国の産業を守ることはよろしくない、ということになったのです。

当然、経済は国境を超えて暴走し、弱肉強食の世界になりました。企業は生き残るためにリストラも辞さなくなります。非正規雇用が増え、成果主義が横行して、社内の愛和も愛社精神も薄れていきます。人は孤独になって、お金のことしか考えなくなります。

弱肉強食の世界ですから、国と国の間でも、人と人の

間でも、当然、格差は拡大します。格差が広がれば社会は不安定で乱暴なものになっていきます。人々は自分を守るために利己的になっていきます。

つまり、経済のグローバル化は拝金主義と利己主義をはびこらせ、「我も人もの仕合わせ」や「共生」とは反対の方向に社会を進めているように、私には思えるのです。

ご専門の先生方を前にして恐縮ですが、グローバリズムは剥き出しの原始的な欲望です。経済の独走を許すのではなく、人々の幸せを基準にして、政治がルールを作ってバランスをとる。安定化をはかる。それが社会の進歩というものだったのではないでしょうか。

倫理も同じです。人と人とが互いに認め合って、他を侵さない。そのためのルールが倫理であるといってもよいでしょう。

私たちは拝金主義と利己主義に代えて、人と人、人と自然とが共生し、誰もが幸せになる倫理社会を目指します。

そして最後に、諏訪大社の「御柱祭」です。四月の上旬のことだったと思います。テレビの画面に、樅の大木が山の急斜面を勢いよく滑り落ちる様子が映し出されました。その大木の上に乗った男たちが次々に振り落とされます。祭のクライマックス、下社の「木落し」です。

諏訪大社は奈良時代以前からの古い神社で、一二〇〇年続くという御柱祭は六年ごとの寅年と申年に行われる大祭です。

諏訪盆地の周りの山で伐り出した樅の大木を山から運び出す「山出し」。山から降ろした木を境内まで運ぶ「里曳き」。そうした神事は大勢の氏子たちの手で行われます。直径およそ一メートル、長さ十数メートルの大木を、上社と下社と二つずつある社の四隅に、全部で十六本建てるのです。そうすることで、大木は神の木となり、聖なる場をしきるとともに、天から降る神様のための目印となるのです。

「木落し」や、御柱を境内に建てる「建御柱」は、ときには犠牲者も出るほど勇壮な神事です。そのさまを見ていると、大自然の中で生きた私たちの先祖の思いとは、かくも激しく熱いものであったかと、思わず居住まいを正さずにはいられません。

祭に参加した人々は、祖先たちの熱い思いを胸の内によみがえらせます。そして、いまの自分の荒々しい暮らしの中で、日々流されてゆく心を引き締めるのです。人々はこの世に生きることの原点を、束の間、思い出すのです。

御柱祭だけではありません。ねぶた祭も三社祭やだん

じり祭も、その熱気の中に、かつて自然の中に根付いて暮らしていた、日本人の生きる力の強さが垣間見えます。それは、縄文の土器や埴輪に見られる、あの燃えるような生命力と同じものです。しかしそれは、祭の後の日常からは、もう失われてしまった力です。

私たちの生きる力は、何故かくも衰えてしまったのでしょうか。それは人々の暮らしが自然から離れて、大自然の摂理を忘れたからです。森や田畑が荒廃していくとき、日本人の生きる力も倫理力も衰退していったに違いありません。

海外から帰国するとき、飛行機が日本列島の上空にさしかかると、色濃い緑の森が眼下に広がります。灰色の大地が続いた果てにある海中の緑の島国、それが日本列島のきわだった特徴です。

私たち日本人にとっての自然とは、そうした山であり、川であり、海であり、そこに生命を育む緑の森です。日本人はその舞台の中で生かされてきたのです。

とりわけ、遠い昔から祖先の暮らしを支えてくれた里山の森や田畑は、私たちの心の原風景です。私たちの祖先は縄文の昔から、そうした自然を畏れ敬い、自然の摂理に従って生きてきたのです。

しかし、戦後の高度経済成長期になると、多くの若者たちが故郷を離れて都会に出ていきました。田畑から工場へ、大きなうねりとなって人々が移動しました。それが自然との決別を意味していました。

いま、故郷の森はどうなっているのでしょうか。我が国は、国土の七割近くが森であるといわれています。その森の木が戦争中にむやみに伐採され、戦後になると、そこに杉や檜の針葉樹が植えられました。なぜ針葉樹だったかといえば、成長が早くて、建材としての需要が見込まれたからです。

しかし、一時期さかんに造られたこの人工林も、外国の安い木材が入ってくるようになると、見向きもされなくなります。昭和三十年（一九五五年）に九割以上あった木材の自給率は、わずか十五年後には半減して、いまでは三割にも届きません。日本は先進国の中では、フィンランド、スウェーデンに次ぐ森林大国でありながら、世界有数の木材輸入国なのです。すべてはソロバン勘定の結果です。

その後、人工林はどうなったかといえば、伐採されることもなく放置されました。手入れもされず荒廃してゆく針葉樹の森は、二酸化炭素の吸収力も保水力も弱まって、いまでは各地で土砂崩れの原因になっています。

山の森だけではありません。里山の林も田んぼも畑も

同じ運命を辿りました。林業も農業も、血眼になって工業化を進める戦後社会の、役に立たない盲腸とみなされたのです。

人手がなくて高くつくから、外国から安い木材を買えばいい。安い食糧を輸入すればいい。そういうその場しのぎの損得勘定が、木材の自給率二九パーセント、食糧三九パーセントという、まことに危うい数字になったのです。

社会が高度に産業化し、経済がグローバル化していく中で、倫理や道徳が忘れられていったのと同じように、自然も忘れられていきました。荒れゆく森や田畑の風景は、日本人の心の姿でもあったのです。

しかし最近、衰退した林業の世界でも、現状を変えようとする新しい実践が始まっています。これまで伐採といえば、森林組合や企業に任せて、大型機械で補助金目当てに大規模伐採をするというものばかりでした。そうした乱暴なやり方では、周りの森まで荒らしてしまいます。

高知県を拠点に活動する中嶋建造さんたちが進めているのが、地元に住む自分たちの手で森を守り、きめ細かな管理をしていこう、昔ながらの小型機械で木を刈り、植林し、木を育て、しかも収入につなげていこうという自主独立の路線です。

それだけではありません。木造チップで作るバイオマス燃料や建材など、木材の新しい利用法を開発したり、林業と農業の兼業のあり方を探るなど、多角的な活動を展開しています。中嶋さんたちの成功で、林業に夢を託す若者たちの、UターンやIターンが増えているといいます。

また、奥多摩の東京チェンソーズは十年前、三人の若者たちから始まった元気な会社です。この会社の仕事は、伐採、植林、育成などのこれまでの林業の枠を超えて、木材の流通から、木の玩具作り、子どもたちの木登りや、チェンソーを使った丸太切りの体験イベントまで、思いついたことは何でもやってしまいます。いまでは社員も十人を越え、チェンソーを手にした女性社員もいるそうです。

いまや「地方創生」の時代です。この森の再生の試みと同じように、農村でも漁村でも、あるいは地方の町でも、地域の活性化に挑戦し、成功してきた事例はたくさんあります。これまで私は会友の皆様に、そのいくつかをご紹介してまいりました。なぜなら、我が会もまた、改革の途上にあるからです。

そうした地域再生の成功事例には、共通する点がいく

つかあります。

その第一は、県や市など、行政主導の改革ではないということです。市民や地域が主体となった改革だということです。改革の成否は、ひとえに現場の積極性にかかっているからです。我が会でいうところの「随所で主となれ」ということです。

第二は、成功した事例では、前例や常識など、これまでの枠組みにとらわれていないことです。それこそが新しい発想を生み出す絶対条件だからです。さらにいえば、行き詰まった現状を変えるために、新しい発想で自分自身も変わったことです。改革とは、自分を変えることでもあるのです。自分を変える勇気が必要なのです。

第三は、「気づき即行」です。できない条件を挙げる前に、まずやれるところからやっていくフットワークのよさが共通しています。実践しなければ何も生まれないからです。

第四は、改革に終わりはないということです。いずれの成功事例も改革し続けているから成功しているのです。

私たちの改革も、これらの条件を満たしたとき、大きく前進するに違いありません。

ここまで、テレビ番組にまつわる三つのお話をしてきましたが、その言わんとするところはすべて一つのことです。

本当の豊かさとは何か、幸せとは何か、私たちはどこに向かうのか、ということです。その答えは皆様お一人お一人が出さなくてはなりません。それぞれの実践でお答えいただきたいと思います。

さて、我が会は本日をもって新しいステージに入ります。それをどんなステージにするのか、それはひとえに今後の皆様の実践にかかっております。

私は、我が会の未来の姿を、丘の上に立つ一本の大木としてイメージいたします。堂々として動かず、年輪を重ねるごとに真っ直ぐに天に向かって幹を伸ばす。大いなる枝を広げて、木陰に集うものすべてを仕合わせにする。その大木はどこからでも見えて、道を示す。そんな会になることを夢みております。

会友の皆様には、倫理の森に一本の木を植えて、大切に育てていただくことをお願いしたいと思います。

最後に、すべての皆様のご健康とご多幸をお祈りいたしまして、実践倫理宏正会創立七十周年記念式典の、私のご挨拶とさせていただきます。

ご清聴、有り難うございました。

（日本武道館にて・当日収録／文責記者）

ご来賓ご祝辞（登壇順）

抄録・文責　編集室

一歩踏み出して輝く未来へ

内閣総理大臣　安倍晋三（あべしんぞう）

皆様、おはようございます。安倍晋三でございます。

このたびは実践倫理宏正会創立七十周年、誠におめでとうございます。

創立六十周年の際には、官房長官として出席をさせていただきました。あれからいろんなことがございましたが、この七十周年にあたって、総理大臣として記念式典に出席できることは、感無量でございます。（拍手）

上廣哲彦初代会長先生が、広島で実践倫理宏正会を創立されたのは昭和二十一年五月三日、東京裁判が開廷した日でありました。日本は連合国の占領下にあり、多くの日本人が、今後日本はどうなっていくのかという不安を抱えながら、物資の不足など毎日を生きるだけで精いっぱいだった、混迷を極めていた時代のことであります。

初代会長先生ご自身も被爆され、まさにその体験を通して、実践倫理普及の必要にお気付きになられ、実践倫理宏正会を創立されました。

そうした時代にあって、万人が共に幸福に暮らせる未来を目指す活動にあたるご苦労は、想像を絶するものではなかったかと拝察いたします。

再来週、「伊勢志摩サミット」の終了後に、私はアメリカのオバマ大統領と共に被爆地広島を訪問いたします。

アメリカの大統領が被爆地を訪問するのは戦後七十一年にして初めての出来事であります。被爆の実相に触れていただき、そしてその時の気持ちを、思いを、世界に向けて